

KSKQ

ゆうとおん通信

NO.113	2019年7月号	郵便振り込み口座 00910-9-106532
編集人 (社福) ゆうとおん ゆうとおん編集員会 八尾市久宝園 2-30-4		

一九九二年九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行 定価50円



福光 萌子 (ふくみつ・もえこ)
 1996年大阪府生まれ。地元の小中学校を卒業後八尾支援学校へ。卒業後ゆうとおんに。23歳。柏原市在住。

いきなり、「キュアセレーネ!」と呼び止められました。えっ? と面食らっていると、福光舞台監督からすでにアニメキャラクターの名前ももらっている職員たちはよく心得たもの、監督の指示やご意向にそったセリフとアドリブで会話をします。すると、ぱっと作業所の雰囲気か明るくなって笑い声がたえませぬ。そんな福光さんにみんな一目おいています。ちなみに監督の好みで男性職員はさえない名前ですが、女性職員は全員キラキラネームをつけてもらっています。

ここで、生きる

人シリーズ No.13

午前中は軽作業、午後は休憩をかねて近くの公園で過ごします。福光さんは集団行動がちよつと苦手。ここと決めたイスに座り、飲み物はポカリスエット限定。一滴の水もお茶も口にしない徹底ぶりです。

パソコンを扱うのはお手のもので、休憩が始まると、グーグルで画像検索して好きなアニメのキャラクターを見て過ごします。なんでも、支援学校時代は演劇部で活動していたとか。どつりで役になりきったセリフで周囲を福光ワールドに誘い込むのがうまいはずと納得できました。

実は、福光ワールドをささえる名脇役のぬいぐるみ達も作業所カバンで一緒に通所しています。この脇役たちがいないと監督の一日は始まらない。一人でも姿が見えないと、さあ大変。愛すべき分身たちとともに、今日も職員の演技指導に余念がない福光さんです。

(聞き手 島袋 美紗子)

目次	・特集 当事者が語る家族と職員への注文 …… (3)	・「それって、どうなん?」 西村 博子 …… (7)
	・虐待について考える No.5 堀 智晴 …… (4)	・「強度行動障害者は作られる」 豆子 寿士 …… (8)
	・総会発表「わたしのしごと」 …… (5)	・リレーエッセイ 富澤伸行 …… (9)
	・日帰り旅行 …… (6)	・当世作業所事情No.75 畑 健次郎 …… (10)

とくしゅう とうじしゃ かた
特集 当事者が語る



しよくいん ちゅうもん
職員への注文

かぞく ちゅうもん
家族への注文

みなさんの「声」を あつめてみました。きびしい「声」が、そくそく屈きました。えっ、ほんまっ？ウソでしょ！ 誤解やわ、そんなつもりじゃないよ…いいわけは山ほどあるかもしれませんが、一挙公開。

心当たりがある人も、ない人も、まずは、みなさんの「声」に耳をかたむけ、謙虚に受け止めるところから始めたいと思います。

えらそうに言われたり、うるさく言われるのは嫌や。お姉ちゃんかて、気をつかう。

お母さんは小学校の時に亡くなって、お父さんは、コロナーにいる時、お姉ちゃんから電話で亡くなったのを知った。お父さんが元気な頃は、お姉ちゃんに、えらそうにいわれたこともあったけど、今はあまりない。お姉ちゃんが新しい家に引っ越して、そこに泊まった時、昼やのにポータブルトイレを使って、「階段を下りて二階のトイレに行かなあかん」と怒られたことぐらい。

ちゅうもん

最近、お姉ちゃんのとこに帰っていないし、えらそうに言われることはない。ちよつと帰りた

いと思うこともあるけど、夜のトイレは、お姉ちゃんを起こして連れて行ってもらわないとダメなので気をつかう。この前、会いに来てくれて、いっしょにコーヒーを飲んだ。また、会いに来てほしい。

職員には、仕事のこと、あーだ、こーだと言われることがあって、腹が立つことが多かったけど、いまは言われることが少なくなり、腹が立つことが減った。グループホームも、うるさかった世話人と最近はうまくいっている。

(匿名)



しっかり
きいてよね!

もやもやした気持ち、聞いて

特に問題なく仲よく暮らしているけど、心のなかにももやもやがある。お母さんに、ちよつと腹立つ。僕との約束をど忘れて、弟妹、特に妹とよく出かけた。何回も、僕との約束をコロッと忘れる。本やDVDのことなど聞きたいのに、なんでも自分でしなさい、考えなさいと言う。前の仕事(一般就労)の給料も家に入れないとか言わなかった。いっしょに働いていた先輩に「家に入れなアカン」と言われるまでわからなかった。自分で気づきなさい、考えなさいって、お母さんは厳しいなあ、しゃべりづらいな。仕方ないので、お父さんに聞いてアドバイスももらった。弟妹に聞くのは恥ずかしい。お母さんは、男にやたら厳しく、女に優しい。ありがたい面もあるけど、もう少し、アドバイスをもらいたかった。

調子に乗って、たまに職員さんとケンカするけど、だいたいは仲よくやっている。グループホームで、忙しくしているのに気づかず話しかけて、「今、忙しいから後にして」と言われてしゃべりづらいことがあったけど、今は、しゃべれる。「Mさんの部屋が一番片づいていない」とみんなの前で言われたり、洗たく物の干し方で、いろいろ言われるのは嫌やなあ。

(匿名)

職員に言いたい

- 全員、考え方を前向きにかえてください。どういうことかというのと、プライベートと仕事の区別をはっきりつけてほしいです。自分の思いを押しつけたり、八つ当たりしないでほしいです。私の言いたいことは、それだけです。
- 以前いた職員に怒られてとても嫌だった。
- 私が、あいさつしても、あいさつしない職員の人がいる。えらそうにあいさつする。
- 厨房のごはんで、ジャガイモのカレーいためが食べてみたい。
- 私も名札をつけたい。
- Hさんの入院のことなど、大切なことは、私たちにも教えてほしい。

家族に言いたい

- もっと、大人っぽい服を着たい!
- わたしも化粧がしたい。
- ひとりで遊びたいのに兄弟の面倒をみさせられるのがいやだ。
- 病院から止められているのに、お酒やめてほしい。

お母さん、何でもかんでも反対せんといて。

自分のやりたいこと、いつも反対されてる。バドミントンの選手になりたいって言うたときも、「ケガするからアカン」と言われた。プロレスをしたいと言うたとき「観戦するだけならいいけど、やるのはアカン」と言われた。「結婚して、赤ちゃんも欲しい」と言うたときも「付き合うのはいいけど、結婚は、絶対アカン」と言われた。なんでお母さんは、反対ばかりするのかな...たぶん心配してくれてる。それはうれしいねんけど、でも、ちよつとなく。

(匿名)

職員さん、交換条件、やめて!

「〜しないと〇〇へ連れて行かない」と交換条件を出すのをやめてほしい。嫌な気持ちになり、怒ってしまう。仕事も、やれやれとしつこく言われるといらつく。

(匿名)



堀 智晴（ほり・ともはる）

1947年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考えましょう」。インクルーシブ（共生）教育研究所代表。ゆうとおん監事。

No.5

虐待について考える

「ゆうとおん」での、虐待をなくすとりくみ

生きてきた歴史が見えてくると…

「私たちは私でありつづけることのできる私たちをめざします」これが、ゆうとおんの行動指針のひとつです。すこしわかりにくいのですが、「私であること」を、まず大切にすることはほんとうに大切です。虐待は、このような「私であること」を傷つけるものです。

最近、知的障がいのある人が、これまでの自分の人生を語り始めています。それをみると、これまで霧のなかにかくれていたその人なりの生きてきた歴史が浮かびあがってきます。一人ひとりその人の歴史、つらいこと、くやしいこと、うれしいこと、悲しいこと、哀しいことがじわっと伝わってきます。

がまんしていたこと（青山さんの場合）

ゆうとおん通信の「わたしの体験」（ゆうとおん通信NO.107、2018年1月7日発行）を読むと、青山さんの体験が書かれています。養護学校を卒業して働いていた会社でうけた虐待が報告されています。「工場は、個人の家のような感じで、

社長や社長の息子さんから『早くしろ！』って言われたり、どなたたりしました。両方からなんども、どなられたり悪口を言われました。息子さんは30代後半で、たたかれたことがあります。『さつさとしろや！』とか『さつさと辞めろや！』と偉そうに言われたりしました。社長には、はさみで頭をたたかれました。でも、ぼくは、我慢しました。耐えていました。味方になってくれる人はいませんでした。」

虐待をなくす新しい人生、はじまるー！！

青山さんは、このくやしい体験を、当事者の会の「きめる会」で発表し、みんなで虐待をなくそう、と発言されました。虐待をなくすとりくみがゆうとおんでも始まったのでした。このようにして、青山さんは、自分の歴史を傷つけてきた虐待をふりかえりながら、虐待をなくす新しい人生を歩み出されたのでした。（ゆうとおん通信NO.109、20018年8月6日発行）

私は、このとりくみに期待しています。



2019/6/8 (土) ^ど ^{そうかい} 総会

^{とうじしゃ} ^{かい} 当事者の会「^{かい}きめる会」のメンバーが「^{わたくしの}わたしの^{しごと}しごと」について^{はっぴょう}発表、^{しょくいん}職員に^い言いたいことや、^{おも}こうなったらいいなと思うことを^{ていあん}提案しました。

はじめてはたらいたかいしゃで
どなられたの たたかれたの しました。
すくいやつた。

いまは パンをくっつけてます。
もっときゅうりょう あげばいいです。
3まんえんくらいほしいです。

できることが
ふえてうれしい。

しごとの せつめい
は、むずかしいこと
ばつかわないで。

きゅうりょう
ふやして!

しかいも、すっかり なれました。
わたしたち いきが ぴったり
あっていたでしょ。

さをり がんばってる

しょくいんのひと
もっと まえむき
になってほしいわ

Sさん、ぼくの しごと
ちゃんと せつめいしてよ。
いかに ぼくが がんばって
いるか。
そこが だいじなんだから!

しごと? そんなもん
よゆう、よゆう! / / / /

かりんとう つくってます。たいへんなとき
もあるけど おきやくなんから
「おいしかったな」といってもらえるのが
うれしいです。

はいたつは そとのけしき
を たのしんでいます。だれかさんの
だじゃれがね … あれ やめて。

支援の現場から

「それって、どうなん？」

ほーぷ 生活支援員 西村博子

『それって、どうなん？』という言葉について考えてみた。

それは、不満や落胆、悲しみや怒りを含んだ疑問文といえるが、同時に大きなパワーを秘めているともいえる。『それって、どうなん？』は、「なんでそうなった？」、「じゃあ、どうしたらいいん？」、「私に何ができる？」と続いていくように思う。そのように考えていくことは、支援の現場では、起こった現象を掘り下げることや新しいアイデアを生むことにつながる。現場には老若男女、役割や視点や考え方の違うたくさんの職員がいる。その中で話し合い、意見を出し合い、新しい支援が生まれていく。その第一歩となる重要なキーワードといえる。

そしてもうひとつ。私が大切にしている『それって、どうなん？』がある。私は長年、生活支援員として働いているが、「私は人を支えているの？どうなん？」という素朴な疑問をいつも持っている。福祉職に就いてから障がいのある人達とのたくさんの出逢いがあった。少しでもみなさんをわかりたい、支えたいと働く中でこんなことがあった。

私が汚れた手を拭くハンカチを持っていなくて困っていると、ご自分のタオルを差し出してくれた。私が体調不良で休職中に道でばったり出会った時には、私の姿が見えなくなるまで心配そうにずっと見送ってくれていた。家庭の事で悩んで落ち込んでいた私が涙をこぼしてしまった時、言葉を持たない彼女がうつむく私の顔を覗き込んで、満面の優しい笑みで励ましてくれた。関わる人たちの変化や成長を目の当たりにして、職員みんなで歓喜したことも数えきれない。

思い出すだけでありがたくて、嬉しくて、涙が出そうになる。だから、自分自身がどんなにしんどい時でもこの仕事を続けることが出来たと思う。出逢ったみなさんがそのままの私を認めてくれて、優しく見守ってくれていたと感じる。私は『支えられている人』なんだ。でももし少しでも人の支えになっているとすれば、それはお互いに『支え合っている』のだ。そう感じた時、自分が生きて存在している意味があるのかなと思える。

まだまだ未熟で至らない私は、これからも『それって、どうなん？』という自問自答を繰り返して生きていく。

■現場の悩みを一緒に考える

「強度行動障害者」は作られる—社会モデルについて

特定非営利法人活動法人ラルゲット 豆子(西尾)寿士

公認心理士・相談支援専門員

第2回は、社会モデルについて改めて考えてみたい。ヒントになったのは熊谷晋一郎の論文およびドキュメンタリー映画『道草』(宍戸大裕監督・2019)を観たことである。熊谷は社会モデルについて『障害は、少数派の「中」に存在する特徴ではなく、少数派と社会環境との「間」に生じた齟齬のことである、という考え方のことを、障害の社会モデルと云う』と説明している(熊谷晋一郎他、2017)。また彼は、近年の重要なトピックの一つとしてある「障害者運動のバトンをつなぐ」という課題について、(1)もう一度言葉を生み出す、(2)社会モデルの不徹底、(3)依存先の分散、の3点をあげている(尾上浩二ら、2016)。(1)と(3)については別の機会にゆずり、ここでは(2)社会モデルの不徹底について取り上げる。彼は綾屋紗月らと進めている「当事者研究」の実践研究から、自閉スペクトラム症(ASD)の診断基準を次のように鋭く批判している。すなわち、コミュニケーション障害や社会性の障害といわれるが、本来コミュニケーションとは人と人の「間」に生じることであり、ひとりの人の「中」に存在するものではない。社会の問題や関係の問題を本人の性質に押し付けるような仕組みが、診断概念自体にビルトインされている、のだと。

筆者は、医学モデルを批判してきた者の一人であるが、熊谷や綾屋の批判を前にして、これまで何ら批判的視点を持たずに「コミュニケーション障害」という概念を受け入れてきたことに気づかされた。そして、この批判は、ASDの人たちだけでなく、知的障害や強度行動障害と呼ばれる人たちにも当てはまるのでないかと考えた。もちろん、これまでも知能指数等で人を分類することに対しては、能力主義批判、現代社会批判として考えてきたことはあった。

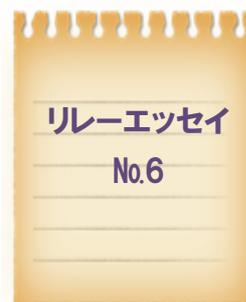
しかし、筆者は知的障害や重度の自閉症を持つ人たちの「障害特性の理解」を強調することで、熊谷が指摘するように、社会モデルとしては不徹底であったと言わざるを得ない。環境に適応することに困難を抱え、様々な支援・配慮が必要な状態の人が周囲からの不適切な支援を受けることで、自傷行為や他害行為(あるいは触法行為等)を発現する。そのことを少数派の問題にしているのではないか。「強度行動障害」とレッテル貼りされ、「強度行動障害者」が作り出されているのではないか。

このように考えた時、映画『道草』のパーソナルな支援は多くの課題を提出しているように感じた。1対1の支援だからこそ、環境要因となる介助者自体の問題(関わり方や考え方が大きくクローズアップされた。援助を必要とする人をどのように理解し対応するのか、個別の適切な支援とは何なのか、その「力量」が試されており、映画の中ではその「支援の力不足」が示されていると感じた。筆者は、その力量アップを一人の介助者に求めるのではなく、チーム支援の中に求めたい。映画の中で末永さんが、何かあればすぐに皆で集まり話し合い、同じような失敗が繰り返されないようにどうしたら良いか考えてやってみる、その繰り返しが支援だということのような内容を語っておられるが全く同感である。当事者の中に問題を探すのではなく、私たちを含む環境との関係性の中に問題を見つけ解決していくのが私たちの仕事である。

参考文献

熊谷晋一郎 「強いられる他者の理解」『ゼロプラス』特集他者の理解』太田出版 2017

尾上浩二ら 『障害者運動のバトンをつなぐ—いま、あらためて地域で生きていくために』第4章受け取ったこのバトンはナマモノであったか』生活書院 2016



「ギャラリーありありす」でデッサン教室を担当しています。世話人とガイドヘルパーとして就労していて、自称画家でもないです。

たしか、酒宴の席でホープの2階のギャラリーを有効利用する手立てはないかと持ち掛けられて、酔うた勢いも手伝って提案したのが始まりでした。

もう3年目になりますが、6名ほどが常時教室に来ています。

ずいぶん昔に美術家を目指して、朝から夕方まで美術研究所のアトリエで毎日デッサンばかりをしていた生活もありました。若い頃に身に付いた意識や技術というのは錆びつくことはあっても、忘れることはないなあと教室で実感しています。

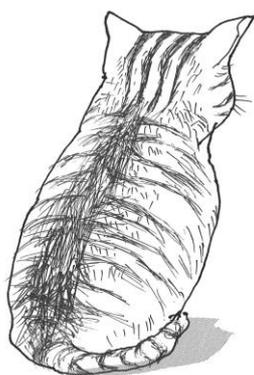
先生は生徒の前で手を明かしたりしませんが、(批評のみ)、私の場合おそらく信頼されてなかったんでしょうね、生徒さんから「手本を見せてほしい」と言われたのがきっかけで今は皆さんと共に描いています。

3次元の空間を平面の紙の上に表現するには、対象を観察する力と空気を読む力(空間認識力)が必要とされます。短い時間(3時間)ですが、かなりの集中力を求められます。

この場に来ている人で、年配の方が「教室がある日は、その夜よく眠れる」と言っていたのが印象的でした。何もないところからのスタートでしたが、石膏像を購入したり、静物台や三脚を作ったりして何とか教室らしくなりました。

しかし、続けていると、最近は被写体(モチーフ)のネタ詰まりも感じたりしています。今は「あまり生徒が増えても困るなあ」との発言通り、消極的な先生とも捉えられています。もう一度、最初の意気込みを取りもどさなくてはと想う今日この頃です。

(世話人 富澤 伸行)



●当世作業所事情 75

60年振りに入院しました

畑 健次郎

6月8日、第22回ゆうとおん総会の第二部は、「私の仕事」というテーマで当事者からの発表がありました。それぞれ面白かったのですが、Hさんの報告が特に印象に残りました。仕事に対する責任感、お母さんへの思い、職員に向けた批判：もう少し、じっくり聴いてみたいなあと思いました。

コーディネーターの堀さんは「こっち(当事者側)は仕事を楽しんでやっているのが伝わってくるけど、そっち(職員側)はどうやるか」と職員を挑発します。職員は「おとな」ですからさらに受け流し、残念ながら挑発は蒸発します。

翌日曜日は孫が出ているハーリー(ボートで競漕する伝統行事)を見に行きました。途中から強い雨と風、おまけに雷、ずぶ濡れになって宿に帰りまし

テレビでは香港の民主化運動のニュースが流れています。街路を埋め尽くす人たちは、中国の強権的な統治姿勢にノーの声を上げています。人民の解放を掲げて革命をリードした中国共産党が、今や特権階級と化し自分たちに目障りな人権派への抑圧を強めています。

ジョージ・オーウェルの「1984年」を地で行くような息苦しい管理社会が進行しています。

自分たちの行使する権力は天から与えられたものだからやりたい放題でいいと思っているのは、中国共産党だけでなく、アメリカ大統領も、朝鮮労働党を率いる金氏も、そして安倍政権も同列です。しかし、それぞれの国の民衆がどう感じているのかよくわかりません。慣れることは慣らされることだ、という言葉をあらためて思い起こします。

テレビは沖縄の「民意」を無視して、辺野古の海の埋め立てを加速する日本政府の振る舞いも伝えていきます。アナウンサーは遠慮がちに「埋め立てに反対する人たちの強い反発があるかも知れない」と報じます。

以前、ゆうとおんの研修で沖縄問題を取り上げたことがありました。その時、講師のMさんは、「沖縄にばかり負担を押し付けられないで、大阪に基地を引き取ろう」と提案しました。

Mさんの提案を聴いて、なるほど、そういうものも見方もあるのかと感心させられました。

問答無用は、時の権力者だけに特有のものではあ

りません。権力に抗する者もまた、その内部に一方的な権力構造をつくることがあります。

1972年の浅間山荘事件で名をはせた連合赤軍のリーダーの一人が永田洋子さんでした。獄中で亡くなった永田さんと、2、3回手紙のやり取りをしたことがあります。永田さんたちは革命を志し、武装闘争路線を選択しました。その過程で「総括」と称し、仲間であるはずの同志殺しに手を染めます。永田さんはそのことを恥じ、そして深く悔い、獄中で自己省察をすすめます。皮肉にも獄中という環境が、彼女に初心を思い起こさせます。

総括というリンチを受けた人も、リンチに加担した人も紙一重です。事実、リンチに加担した人が、次はリンチを受けて殺されています。リンチに加担しなければ自分がリンチの対象になります。いじめの構造と似ています。

どんな社会変革の志も、目的が手段を正当化することはあり得ないということを教えてくれた出来事の一つが、連合赤軍の同志殺しでした。



4月4日の朝、仕事場で職員のYさんと話している時、急に呂律がまわらなくなりました。そして立っていられなくなり、いつの間にか救急車がやってきて病院に運ばれました。しばらくすると落ち着いてきて、会話もできます。この程度のこと救急車のやっかいになって面目ないと思いました。

ところが少しすると、また呂律がまわらなくなり、今度は右手がまったく動きません。脳梗塞という診断に納得せざるをえませんでした。

幸いにして、足掛け10日間の入院で退院することができましたが、いつ、なにがあってもおかしくないと実感させられました。看護師さんをはじめ、病院のスタッフは想像していたよりずっと親切でした。ただ患者は圧倒的に病院側の管理下にあることも実感しました。

退院したら「脳梗塞は2度目が怖いで」と言っておかず、いや忠告してくれる人がたくさんいました。もう入院したくないとの思いが強いです、最初のころは神妙に聞いていました。だけど、どんなありがたい忠告も、すぐ忘れてしまうところが、学習能力のある人と、反省能力の弱い人間の差です。

グループホームの住人であるAさんが、また入院しました。彼女は定期的に精神科への入院を希望します。治療のための入院というより、気分転換をかねた入院です。今回も1週間を過ぎたあたりで、職員のTさんへ電話がありました。そろそろ退院に関する話が出てきそうです。

もう一人、Bさんも同じ病院に入院しています。彼の場合はもう少し深刻で、仕事場にも実家にも、グループホームにも自分の居場所がないというのです。つい先日面会しましたが、居場所のなさという感覚は変わっているようには見えません。それでも

退院したいという気持ちは大きく膨らんでいます。私自身は入院することによって、何か得るものがあつたかと問われると返答に窮します。

日頃、読むことのない『騎士団長殺し』や『赤い館の秘密』といった本は面白かったけれど、早く退院したいという気持ちはかわりませんでした。『働きの哲学』という本を読みかけていた矢先の退院は少し残念でしたが。

Aさんにとって窮屈な現状からの逃避先の一つが入院です。でもいざそこに逃げ込むと、そこにもそんな自由がないことが分かります。以前なら、そうした状況をもう少し醒めた目で見ていたのですが、自分が入院してから、少し見方が変わりました。彼女が仕事場で、あるいはグループホームでどんな人間関係を求めているのか、何をしたいのか、あるいはどんなわずらわしさから逃れたいのか、もうちょっと丁寧を考える必要があると思えます。とりわけ生活の場であるグループホームに関しては、関係者を交えてきちんと話す機会が必要かと思っています。

Bさんは前回の「作業所事情」でも少し触れましたが、手先も器用で繊細な人です。ただし、他人に対してはかなり思い込みが強く一面的に見がちです。時には被害妄想にも襲われます。そして自分を追い込んでいきます。Bさんの退院にはもう少し時間がかかるかも知れません。いずれにしても退院したいという思いは大切にしたいと思います。

病院に自由を求めても幻想だということを、彼らは気付いていると思います。問題は、では自由はどこにあるのかということになってきます。

先日、『道草』という映画をシネ・ヌーヴォという映画館で観ました。「八尾事件を考える会」でも上映に取り組むかどうかの試写会をしました。試写会の後、いろんな意見が出ました。彼らの食事風景、支援者の関わり方、「こだわり」のとらえ方：意外に厳しい意見がたくさんありました。映画館で観た時、たとえば亮介くんの親である岡部さん夫妻は彼に提供されている食事をみてどう思うだろうとか、支援者が相模原事件を意識して（重度障害者にも）生きる意味はあるというような発言をしている時、生きる意味と違うやろ、意味などとしてつけなくても生きていることがすでに意味やろ、と思わず心の中でツコミをいれていました。

映画に何を求めるのかにもよりますが、私は『道草』は面白いと思いました。

AさんもBさんも居場所探しはまだまだ続きます。安心して笑っていられる場所の一つがグループホームであって欲しいと願います。

そんなこんなで、今回もまとまりのない「作業所事情」になってしまいました。

【活動報告・予定】

- 6/01 (土) 15 (土) ありありすの「地域食堂」
- 6/03 (月) 管理者研修 講師：細井清和さん(障大連)
- 6/03 (月) ~05 (水) 職員安全運転講習 講師：柿久保 浩次さん
(NPO法人移動送迎支援活動情報センター)
- 6/08 (土) ゆうとおん総会 当事者発表「わたしのしごと」
青山/岩井/小林/寺田/徳山/宮田/中西/西矢/松田/吉岡
- 6/22 (土) グループホーム世話人研修「現場の悩みをいっしょに考える」
講師：石井香里さん(NPO法人出発のなかまの会 管理者)
- 7/06 (土) ゆうとおんホープバザー
- 7/06 (土) ありありすの「地域食堂」 20 (土) ありありすの「地域食堂」『この世界の片隅に』上映会
- 7/16 (火) 「虐待防止」職員研修 講師：堀 智晴さん(ゆうとおん監事)



一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(二・三・四・五・六・七・八の日)発行 定価50円

みなさま ご協力 ありがとうございます

協力会費をいただいた方々(2018年~2019年総会、敬称略)

2018年末の繰越金 5,426,215円、他に法人へのカンパ(175万円)

秋田貴久子 池田由紀子 石橋史大 伊藤章子 糸原栄子 稲垣寛子 井上りか 上田紫織 鶴川雅基
 内田健太 恵光寺 大下地恵子 岡村みな子 小崎美代子 小崎由美 尾崎吉重 カエルホーム
 河合克子 川越均 河端利雄 喜友名奈津子 久住小百合 窪田義廣 甲田恭子 小島農平 小林憲司
 小松悦子 小山広明 金野昌子 斉藤祐子 堺屋和夫 坂田邦子 穴戸大裕 島村恵子 小路梨恵
 庄野久子 新垣康男 末光道正 スマイルファーム 竹中文太郎 竹田幸子 田中誠太 田中正和
 田中百枝 谷口圭一 田畑幸子 墳下智里 辻本亜希子 辻村真嗣 津田健一郎 土橋恵子 筒井健一
 鶴山忠 出口陽子 寺田直加 富澤久美子 富澤伸行 中川正広 中西政信 中西友子 中谷恵子
 中野栄子 中前友見 中村美幸 中矢将仁 長岡利彦 朴愛子 橋本順子 畑健次郎 浜中明子
 林千恵子 林竜児 原田普子 平田真也 福井笑子 福井仁美 福島正人 福田和人 福田蓉子
 福西廣實 福光萌子 藤田敬一 藤塚真紀 藤本壮一 古川晶子 前内佑介 松井潤 松嶋陽菜
 松田健太 松田晴代 松野香織 宮崎弘子 宮本明夫 三輪由美子 森早苗 安田和彦 山本寿
 横田憲一 吉武万喜子 吉田加寿子 和田優理子 (お名前の方からない郵便振替もありました)

- ※ 協力会費のうち500万円を新規グループホーム建設資金の一部に遣わせていただきます。
- ※ 会費、寄付以外にバザー物品の提供等、多くの方にご協力いただきました。

社会福祉法人 ゆうとおん

本 部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784
 ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883
 ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387
 メールアドレス / youtone@live.jp ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>
 年会費 / 1口 2,000円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4階 定 価 / 50円